書籍紹介

『外来種は本当に悪者か ー新しい野生 The New Wild』

フレット・ピアス著

2016年7月　草思社 発行

定価（本体 1,800円＋税）

大橋赳実・浅川満彦（酪農学園大学 獣医学群）

最近，酪農学園大学野生動物医学センター WAMC には隔年に1人はエキゾチック・ペット（以下，エキゾ）医学を目指すゼミが所属している。今回の評者，大橋赳実（たけみ）君もその1人で，夜な夜なエキゾ専門医を目指す先輩ゼミ生と彼のエキゾに囲まれエキセントリックな酒宴を催しているという。評者（浅川）はこういった学生を畏敬の念をもって「エキゾ病罹患者」（以下，「患者」）と称しているが，エキゾ飼育数が劇的に増加する一方，専門家が過少な状況を鑑みると，彼らの存在は実に頼もしい。

ところで，同時に，エキゾが外来種問題の主要な根源の一つとなっている。野生動物医学が獣医師会で喧伝される One world, one health にもっとも近接した学問領域で，かつ，外来性病原体はその中心的課題である。そうなると「患者」に対しては適切な教育的指導が必要となる。そこで，大橋君には外来種関連の書籍を読み込んでもらうことにした。ただ「外来種は絶対悪」前提の正当なものは天邪鬼・へそ曲の典型的「患者」には物足りないはずと勝手に考え，本書を課題とした。

当初，挑戦的タイトルから，本書が「疑似科学」本，はては「トンデモ本」と訝っていた。しかし，敢えてゼミ生の課題とした理由は，著者が環境問題専門のジャーナリストであったこと，したがって，解釈と提案（本書第2と3部）はともかく，本書第1部の事例は客観的記述に終始してくれたこと（後述），これら事例根拠は本書末尾に配された15ページに及ぶ引用文献が章別に明示してあったこと，本書翻訳版が自然史の名著を多数扱ってきた出版社からの作品で，さらに高名な生態学者の「解説」も付記されていたこと（＝何だかんだ言って，権威に弱い）などであった。そして，約9ヶ月！ たって，彼から以下の感想が送られてきたので，まず，ほぼそのまま掲載をする。　（浅川 文責）

近年，日本では様々なメディアで取り上げられている外来種ー最近では有毒のヒアリや大型の凶暴なカミツキガメが発見されたことなどが記憶に新しいがー，は総じて悪であり駆除すべき対象であると人々は感じている。従来の生態系を破壊し，異国の生態系を築くものであろうと思われているからである。本書では，このような外来種の否定的な意見とは異なるアプローチ方法を与えてくれた。

人間が気候変動，環境汚染，集約農業，プランテーションなどで自然を痛め続けている。実は，このような行為に重要になってくるのが外来種，あるいはこれを包含する新しい生態系なのであるという。まず,「自然は安定した完全なものだとする考えは（中略）少数派になりつつある。むしろ自然は行き当たりばったりで（中略）種の入れ替わりはあるし，新しい種が適応することもあれば，既存の種が居場所を失うこともある」という言説は，外来種をとりたてて悪者にする必要はないとの著者の主張も理解できる。また，本書では外来種が荒廃した土地の再生に上手く適応し新しい生態系を構築していくという実例が多々挙げられていた。さらに，生物多様性と言う面でも，次の引用のように，新たな進化につながると主張していた点も印象に残った；「雑種が盛んに出現すれば，たちまち新しい進化の扉が開かれる。地球全体の生物多様性が均一化しても，新たな進化が始まる」。

以上のように，外来種を悪者とはせず，むしろ必然的なものとして捉える主張は，従来の環境保全の考え方とまったく異なった。もちろん，この説には賛否両論があると容易に想像される。私（大橋）自身，人間の介入により外来種が在来種の生息地を奪い従来とは異なる生態系に変わるのは反対である。それが進化の過程と述べている主張も分からなくもないが，在来種の絶滅は固有の種の消滅であり，これは人類全体の大きな損失を意味することではないだろうか。

そもそも，外来種問題は移入原因を作った我々に問題があると言う意識も重要であり，これを回避して，その向こうのことを論議するのも違和感を禁じ得ない。それでも，マンネリ化した外来種問題に一石を投じた書なのは間違いない。　（大橋 文責）

英国本土あるいは旧大英帝国版図内（結果的に全世界に還元される）の先達が行ったエピソードが緻密なのは，この著者が自国の自然を深く理解したいという渇望の現れからであろう。このような渇望の原動力が知識欲なのか，あるいは愛国心なのか，はたまた他の心情・信念か分からない。だが，少なくとも著者が優れた書き手であることは間違いない。無論，翻訳者の力量も相当なものであったので，筆致を十分に楽しめた。だが，著者は伝達を専らとする（サイエンス）コミュニケーターではなく，自由な立

場で解釈と提案を披歴する（作家）ライターであるので，本書は稀有な作品として扱われるのが適切であろう。特に，初学者は注意したいが，指導教員としては上記・大橋君のバランス感が示された感想に少し安心している。

一作品とはいえ，第1部はより客観的な事例が列挙されているので，研究・教育および啓発活動のヒントとしては有用である。実際，評者が野生動物医学専門職大学院時代（2000年から2001年）のキャンパス，ロンドン動物園には昆虫館を改造したWeb of Life（現在は別名称）という施設があり（矢島 2003），そこで展示された外来生物はこれらの事例を見事に示していた。しかし，この施設で展示されるものが膨大かつ多岐に渡るので（なんといっても，生物多様性を展示する！と大見得をきっているので仕方がない），軽い気持ちで訪れたら，確実に消化不良となろう。もし，本気に学習をしたいのなら，この施設だけで丸一日を費やす計画を立て，事前に本書と拙稿（浅川 2001）を読み込んで予習をしておくことを推奨する。

著者のご先祖による母国の動物を植民先にも連れて行っちゃえ，という今思えば自分勝手なムーブメント「順化運動」があったことを包み隠さず語っているが，今日，生物多様性保護運動の拠点になっている植物園や動物園がこの運動に直接・間接的に関わっていたことは，野生動物医学会の会員も注視しておくべきであろう。

そして，外来種だらけのイメージを読者の脳内に形成をさせ，第2および3部で真骨頂が発揮された。すなわち「これだけ蔓延った外来種を駆除するのはもはや不可能であり，地域によってはこの種を含んだ新しい生態系（本翻訳書副題，原書で主題のThe New Wildのこと）が機能している。これを受け入れよ」が余すところなく，読者の頭脳に投影される。もちろん，これに触発され，偏向しない新たな論議を活性化させる契機となれば誰にとってもプラスである。

ところで，著者独特の考えが読者に親和的かどうかは，氷期/間氷期で起きた現象と，ここ百年程度に起きた現象とを同列に扱って然るべきかどうかによると評者（浅川）は感じた。あるいは，本書でたびたび使用される時代区分「人新世」をすんなり受け入れることができるのかどうかである。

高校理科で地学がほぼ絶滅した現状では，これをお読みの若い諸君には少し解説が必要である。今から約200万年から約1万2,000年前の時代区分を更新世と称する。（恐竜が退場した）約6,500万年前から新生代というさらに大きな時代区分があるが，更新世はその一部となる。更新世は，最後の氷期（世間的には「氷河時代」）の終わりは，お馴染みの縄文時代の開始に重なり，これには別に完新世という名前がついている。すなわち，完新世は数万年後にまた始まるであろう氷期までの間氷期である。更新世という約200万年間，氷期/間氷期が規則正しく交互に訪れているので，この「完新世」という時代区分はあくまでも便宜的区分である。一方，最近のヒトによる影響が地質学的にも多大が故，完新世は終了，今は「人新世」とする考えが新興した。本書の著者は，まさにこの「人新世」の信奉者なのである。

まず，評者（浅川）は，自身の研究で得た経験から，これを否定する。いや，そもそも，「完新世」自体，ちょっと違和感があるので，さらなる屋上屋「人新世」はなおのことである。

評者は野生動物と蠕虫とで成立した宿主－寄生体関係の生物地理をライフワークにしている。この研究を通じ，自身が生きているのは間氷期の一瞬であるが，眼前に更新世を通じたドラマを展開させることができた。このままでは単なる危ない人だが，お陰様で，このテーマで博士号学位（大学教員の免許）を得，生物地理学会賞（野生動物医学には歴史的視野が不可欠という信念を醸成）までも受賞した（浅川 2005）。勝因は氷期の避難所となった日本の種を扱ったからだ。もし，これと同じようなテーマを英国にしたら学位取得の機会すら無かったし，そもそも生物地理への意欲も早々と喪失していたはずである。氷期に氷床の下に隠れた大地に，たった1万年程前に分布してきた動物の寄生虫相に多様性は望めない。そのような，生物地理学的に不毛な土地で育ったことに，世界の覇者となり巨大な帝国を築いたこと，氷期後の森林を伐採し丸裸になった自国を再生させたことなどの歴史的背景が，この著者をしてこの作品を上梓させたとみている。

ところで，本書には「ヒトは自然の一部」という言説があった。これが忘れられず，評者にはまるで頭脳にトゲが刺さった症状を呈する。これを認めれば，ヒトの「延長された表現型」には更新世（旧石器時代）における大型哺乳類の絶滅や完新世における世界各地の大規模な焼き畑（その後の二次林再生）などは明らかに自然のイベントである。それは仕方がないとしても，ごく最近の，情報がきちんと生き渡った（あるいは機会があれば入手できる）人の社会での出来事と同レベルにしてよいのか。この出来事には，外来種問題も含むし，どこかの場所で絶滅した動物を同じ種だからといって，絶滅した場所に国家的な事業として放す保護活動も含む。実に悩ましい。（浅川 文責）

引用文献

浅川満彦. 2001. ロンドン動物園 Web of Life における生物多様性の展示方法に関する事例報告. 酪農大紀, *自然科学*, 26: 7-21.

浅川満彦. 2005. 齧歯類と線虫による宿主 - 寄生体関係の動物地理.（増田隆一, 阿部 永 編著）動物地理の自然史ー生物多様性の謎を解く, 北海道大学図書刊行会, 札幌：111-125.
矢島　稔. 2003. 謎とき昆虫ノート. pp.285, 日本放送出版協会, 東京.

『動物園を魅力的にする方法 - 展示デザインにおける 12 のルール』

Wolfgang Salzert 著　冨澤奏子 訳

2018 年 3 月　文永堂出版 発行

定価（本体 5,000 円＋税）

浅川満彦（酪農学園大学獣医学群）

本書は，来園者が動物園（以下，園）にて，より楽しく動物を観察してもらうための施設デザインを解説した実践書で，まず，園の施設責任者は必読である。参考にされた施設は国外（主に欧州の）園であったが, 海獣や海鳥の展示施設も扱われていたので, 間違いなく水族館にも示唆的内容を含む。

ところで，本学会の主要構成メンバーは獣医学，動物看護学，保全生態学，あるいは畜産学など動物それ自体に知的好奇心を抱く人々である。したがって，「園に限らず，社会は分業体制で成立している。経営に直結する営みはその専門のものが考えること。我々は動物と動物に直に接する人間のことだけを考えていれば良い。この学会はそのための科学を担うのであって, そもそも, こういった本を紹介すること自体も如何なものか」として，本書を開くことすら忌避するかも知れない。

ここで簡単な思考実験をしてみよう。幾多の激しい競争の末，幼少からの夢であった園に就職をした。日々，獣医師として，あるいは飼育担当者として休日返上で奮戦した。そのようなある昼休みに, 同僚から, 2, 3 年後に閉園になるのではと耳打ちされる。理由は経営不振。そう言えば，入った時に比べ，客の入りが少なくなった気がするが…。日本社会では概して転職が難しく，リクルート活動自体も相当なエネルギーを要する。本来，動物の健康に費やすべき力がこのような心配で消耗されるので，有能で熱いスタッフであればある程，口惜しい思いをすることになる。

このような危機的経営状態にさせないための効果的手段は予防であろう（疾病対策と同じ）。すなわち，どのようにすれば，よりお客さん楽しんでもらえるのかが至上命題となる。そのような対策を講じる際，本書はとても有益なものとなる。本書で提案されるものは，動物の見せ方に関わってくるので，原資（経営や経済の話なのであえてドライに）である動物の健康状態に悪影響を与えては，運営継続に支障が生ずるのでタブーである。往々にして施設デザインの専門家は動物のことは門外漢なのであるが，本書の著者は園動物医学の専門家であり，両者の視点からの優れたオファーとなっている。そもそも，本書で扱う見せ方には，お金のかかる大きな施設のことばかりではない。たとえば，解説（標識や教材，いわゆるモグモグタイムなどの活動）の意義や配置についても包含をしている。概して，教育と診療とが分業化されていない日本の多くの園に勤務する「何でも屋の」獣医師あるいは飼育担当者には重要な虎の巻となる。

それでも「専門外なので，本書の内容なんて判り難いのでは」と心配している方へ。大丈夫。本書では良い例と悪い例が（主に大陸欧州の豊富な）写真により，並列・対峙させている。前園では各写真のキャプションに名前が明示されているので，欧州に渡航した際，それら実例を確かめに現地訪問できる。しかし，後の方の事例の園は，取り上げられた具体名が明らかにされない。あまり名誉なことではないので仕方がないが，（本当にダメなのか，現状は改変されたのかなどを）確かめることは不可能である。むしろ，参考になるのはこのような失敗例であると評者は感ずるのだが…。ついでに，もう一つ個人的なことで申し訳ないが，評者は近代動物園の始祖とされるロンドン動物園で野生動物医学専門職修士課程を過ごした。しかし，この園が良い例にまったく出ていないのが，大変，気になった（チェスター含む英国および大陸欧州の名だたる園の名は出ているのだが…）。いや待てよ，本書で指摘した宜しくないポイント，結構該当していたような気がするので，仕方がないのかな。なお，副題で示された 12 のルールだけでもここで列挙をしたかったが，やめておこう。本書第 2 章で詳述されているので，これらだけでもご自身で確かめて欲しい。